

●真鍋 博

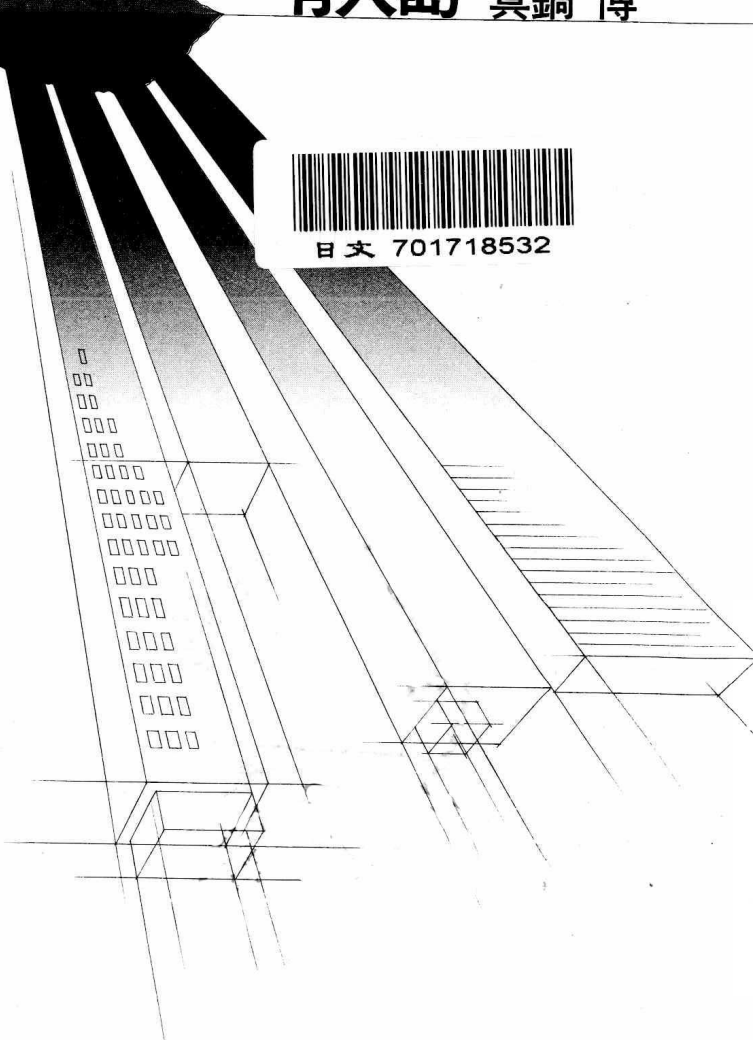


●イラスト・エッセイ

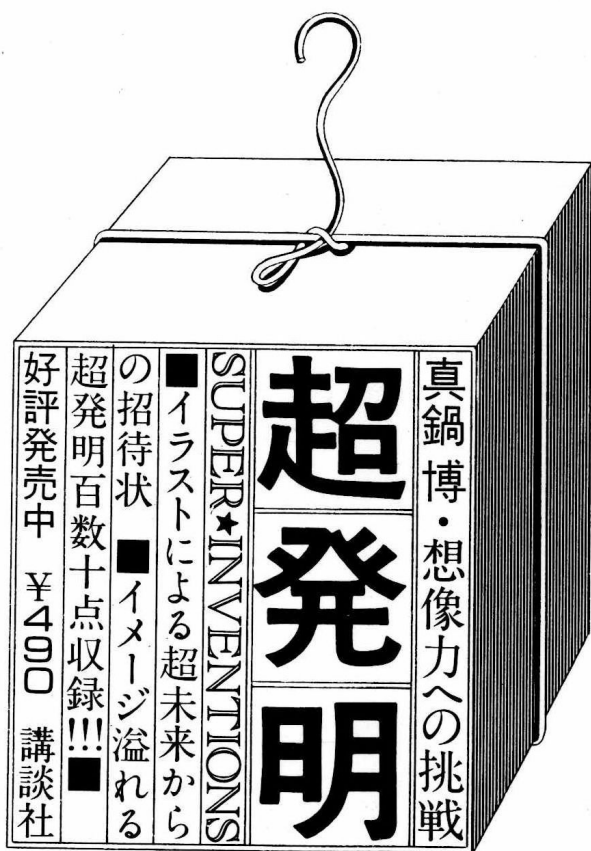
有人島 真鍋 博



日文 701718532



講談社





目次



有人群島
有人島

6



理想の島
トピアの思想

18



自転車共和国
自転車の島

30



ノーカー島
車のない街

44



住居の島
家いっぱい物語——48



島を造る
空を掘る——58



鳥の島
ハトとヒトの都市——64



レジャーの島
「遊び」を遊ぶ——70



島の都市論
人間性都市・都市性人間——96



東京島
ヘルスセンター・東京——88



玩具島
おもちゃの時代——122



色々の島
10色の都市——110



秘境の島
たびたびの旅

198



発見の島
最後の非情報空間

182



島の自然論
大自然は商品か

176



丸い島と四角い島
人間・人間

170



教育の島
空中大学

166



子供島
怪獣はどこにいる？

160



童話の島
動話

158



飛ぶ島
飛行機の飛行記

140



祭りの島

365日のまつり

210



空想の島

新しい神話

216



島の文明論

否文明への道

224

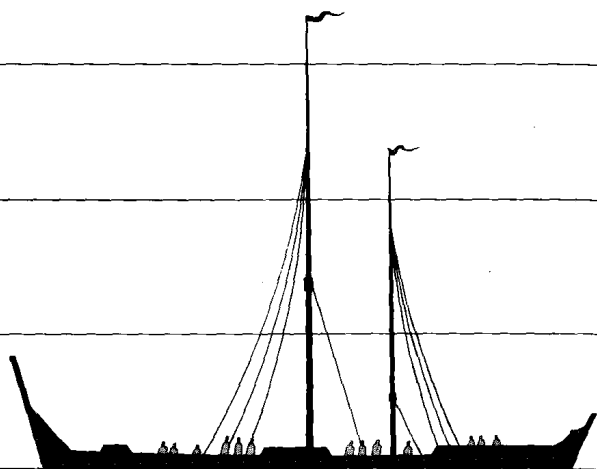


人間の島

超分類の世紀

232

イラスト・エッセイ
有人島
真鍋博
講談社



●有人群島

有人島

都市人間のユートピアはいつも無人島である。

しかし都市禍のなかで急に無人島を夢想しはじめたのではない。

脱都市や脱公害以前、この世に漫画が登場して以来、人は無人島にあこがれてきた。

その無人島は鳥も通わぬ無人の島だっただろうか。

考えてみると、ナンセンス漫画に描かれる無人島はどうやら原始的未文明の島ではないらしい。

というのは、どういわけか漫画のなかの無人島には椰子やしの木がはえていて、たとえガラガラ太陽が照りつけても地表にみごとな日陰をつくるし、海には魚が首をつき出して、釣りもできれば木の実は食べられようというものだ。そして時にはグラマーな人魚が島を訪れたりする。緑があつて、海の幸があつて、美女にもお目にかかれるとなると……ここは原始の島どころか、どうしてどうして「文明の島」なのである。ましてやここにはビジネスもなければ、交通事故も起こらぬし、テレビも映らなければ、電話もかかってこない。

無人島は非文明の島でもなければ、過文明の島でもなく、ほどよい文明の島——都合のいい文明だけのある島、それが現代人の夢みる無人島らしいのだ。

都市にはいまや文明以上のプラスαが多すぎ、われわれは無人島夢想のなかに無意識の純粹文明を求めている。

しかし、そんな島、無人島はこの世にはないのである。

島はあっても、現代人の夢想するそんな島にはたどりつけまい。

瀬戸内海には三千もの島があるが、もしそこに泳ぎついて、あたりを見まわしても、形のいい椰子の木ははえてはいないし、いくら待っても子供の人魚さえ出てはこない。

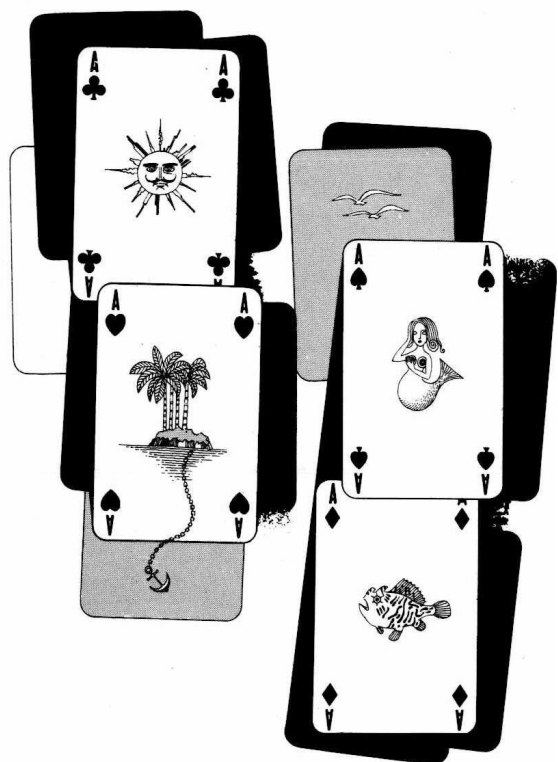




下手をすると無人島開発会社所有地と銘うった立札を発見するのがいいところで、不法立入りを戒める警察のヘリコプターが飛来するのも間近なのだ。

立札もなく、ヘリコプターも来ず、そして所有者のいない完全無人島でも、もはやそれも無人島ではない。自分という人がそこにいるかぎり、そこはすでに人のいる島——つまりは無人島ではないのである。

どうやら無人島とはそこにたどりつくことではなく、都市にいて、人一人いない島を夢想する——イメージの島のことらしい。またそれがいちばん純粋なのである。



無人島は都市人間が都市にいて抱くユートピア——夢人島なのだろう。

しかもそれがほどよい文明、いや純粋な文明をもつ島を指すのだとしたら、われわれのイメージする無人島とは、人一人いない島ではなく、人のいる島、人こそいる島——有人島かもしれない。

無人島とは実は有人島のことなのである。

都市にいて夢想するその島こそ実は有人島そのものでなければならぬ。

だからニューヨークはニューヨーク島をイメージし、東京は東京島を夢に描き、マイホームはマイホーム島の楽園を夢みている。

人は有人島で無人島をイメージし、無人島で有人島をイメージするのだ。

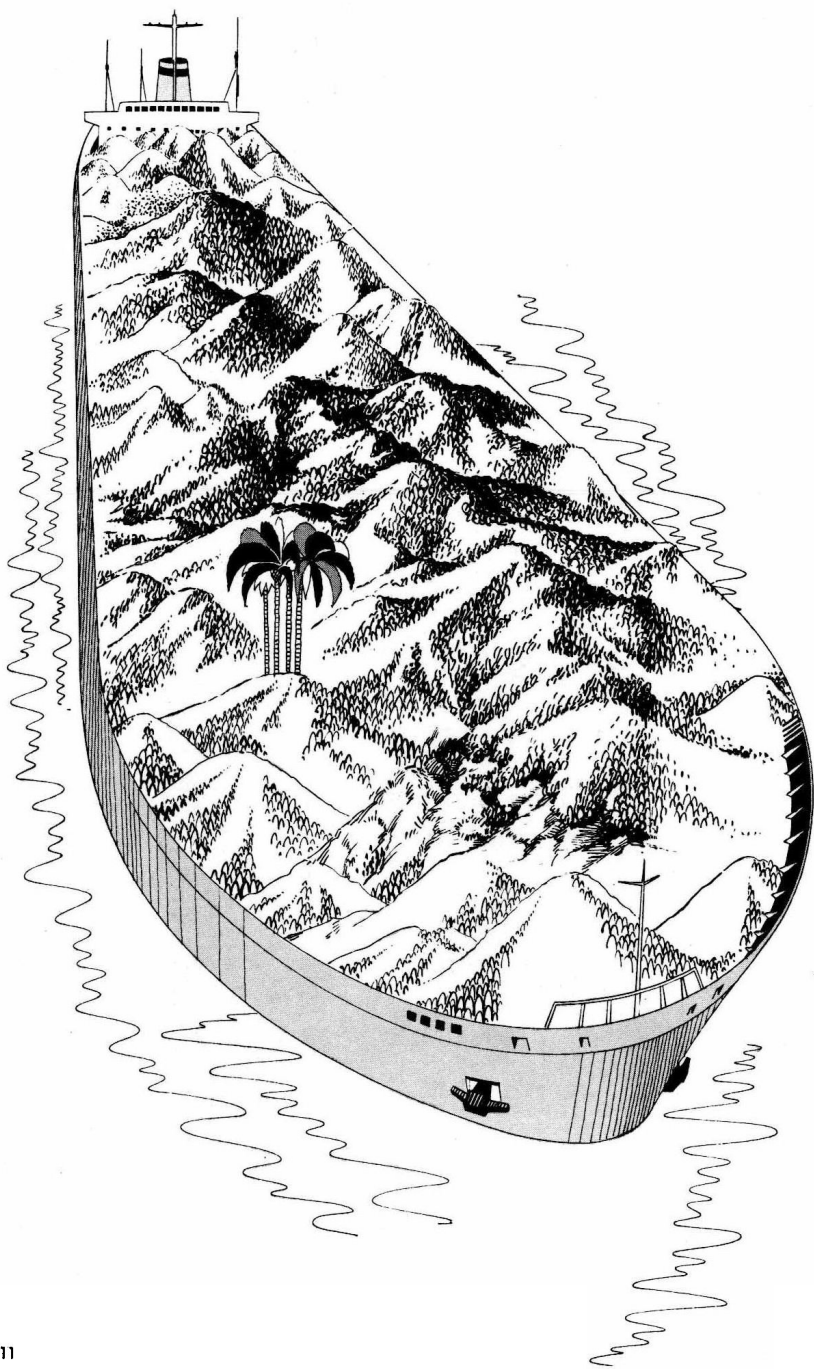
つまり無人島はただ無人島としてあるのでなく、有人島と対比して存在するのである。

われわれは「人のいる島」にいて「人のいない島」を夢想しているというより「人がいても気にならない島」を夢みているのだ。

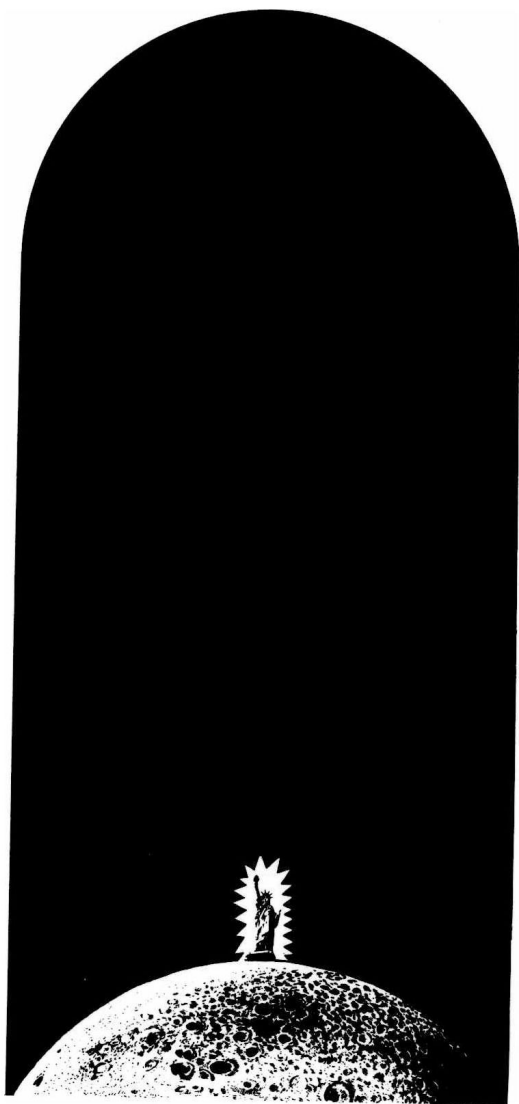
だから最初はいちばん気のあう、そして気にならない人、つまりは自分一人の有人島を考える。

そして、そのイメージする生活に慣れ、少し飽きてくるとその範囲をわずかばかり拡張、友人や隣近所がいてもいい、あるいは少々トラブルを引き起こすようなものがあつたほうが……いやむしろ起こったほうがいいとさえ思いはじめる。

人魚が出現し、逃げ足が速いが捕えてみるとともうまい小動物が登場するのもその時である。そして今度はちよつとむつかしい本でも一冊あつたらいいなと思いはじめるのだ。



友人や、たすけ舟や、人魚を加えて、無人島は有人島になる。
だが、やはりそこは『夢の無人島』でしかないのである。
かたやこちら、現実生活の有人島では人があふれ、人の群れが



塊かたまりになり、それが積み上げられて山になり、やがてこぼれ落ちて
人が河になって流れている。

小動物ならぬ友人も人魚ならぬ恋人もすべてが自然となってい

る。もはやここは自分一人ぼつねんと佇む無人島でしかない。

そしてそこは現実の「有人島」なのだ。

われわれは無人島だけを夢みることも、有人島だけを夢みることもできない。

無人島と対比させて有人島があり、有人島と対立させて無人島があるのだ。

だからインテリアという無人島に住みながら広場という有人島をめざし、アンチックという保守的過去を部屋の中に飾りながら革新

を説き反体制を標榜する。

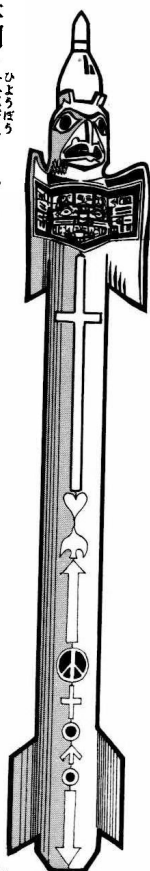
ふるさとへ思いをはせながら、生活地に足をおろそうとし、生活地をもちながら第二の生活地——別荘地を求める。

知恵を求めながら、オートマチックでイージーな知恵のいらない知恵をはたらかす。

無人島は有人島の対象物である。

有人島は無人島の反面島である。

だから、現実の有人島はわれわれの宇宙なのである。



それは無人島をも含む有人群島の宇宙である。
その無人島をかくも自由奔放に夢みられるのなら、他の島に対し



てそれができぬ道理はない。

コロンブスは決して無人島を目指したのではなかったはずだ。

彼らが目指したのは豊かな土地と質を異にした文化だった。

われわれこそ生活島の原住民である。

そしてそこから近隣の有人島に限りない興味と新しい文化を求めて船出してゆく——それが現代の冒険なのである。